

古代出雲と朝鮮半島 — 神話で描いている長距離貿易

Ancient Izumo and the Korean Peninsula: Long-distance Trade portrayed in Mythology

アンデス・カールキビスト*

Anders CARLQVIST

One of the peculiarities of the historical chronicle *Nihon shoki* (better known to the English audience by the name *Nihongi*) is that it often records variations of the myths it relates. This paper concentrates on one of these variations, the fourth variation given to the well-known myth about Susano as he descends to Izumo and slays the eight-headed snake Yamata Orochi. Contradictory to *Nihon shoki*'s main text, the variation here put under analysis tells that Susano first leads many soldiers to Korea, and thereafter goes to Izumo in a boat made of mud. The present paper argues that Susano here represents a tradesman, and that the myth depicts the exchange of Japanese soldiers for Korean earthenware, the latter thereafter brought to western Izumo. It is further suggested that during the late Yayoi Period a center for long-distance trade existed in western Izumo, something that could explain both the myth, as well as the extraordinary archaeological finds done in the area.

Keywords: Izumo, Susanoo, Long-distance trade
出雲、素戔鳴尊、長距離貿易

はじめに

加茂岩倉遺跡が発見された時、それは私が初めて松江に到着して1ヶ月目だった。約2000年間の眠りから目が覚めたばかりの銅鐸を覧ることのできたのがきっかけで、私はその1996年から現在までとどまることなく古代出雲と共に歩んできた。今年の秋学期からは御陰で岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科に着任している。この小稿で、私の専攻する古代出雲と現在の職務に関わる国際文化を合わせ、『日本書紀』に記される短い一書の1つを再検討したい。

様々な日本古代史の研究者は人工遺物・神話・海流などの形跡を参照しながら、昔から出雲と朝鮮半島とのあいだに交流があったと推定している¹。本稿もこれまでの研究同様に、出雲と朝鮮半島とのあいだに交流があったと推定するが、しかし、この推定のみにとどまらず、前例のない試みとして、『日本書紀』の短い一書の1つからそれらの交流の実態的理解を目指し、論じていきたい。これを論じるに当たって、古代ギリシア神話を新しい眼で見た Morris Silver の大胆不敵な解釈方法を参考にしながら²、『日本書紀』(神代上)に記されている「素戔鳴尊の八岐大蛇退治神話」第4の一書を出発点としたい。ギリシア神話の英雄の一人であるイアソンは旅に出て、黄金の羊の毛皮をギリシアに持って帰国した。この神話は商品・交換などについて一切触れていないが、Silver の解釈によれば、この神話は長距離貿易を描き、

イアソンは商人である。

本稿が取り上げる一書にも商品・交換などは出ていないが、本稿は Silver と同様にこの神話に登場する素戔鳴尊という英雄が商人であることを論じたい。そして、資料を神話に限らず、出雲国の地理的な位置を考慮しながら斐伊川下流域にある荒神谷遺跡(青銅器)・加茂岩倉遺跡(銅鐸)・西谷墳墓群(四隅突出型墳丘墓)の意味についても探りたい。

I. 素戔鳴尊の八岐大蛇退治神話

周知の様に『古事記』と異なり、『日本書紀』神代上は神話の本文の他に別伝、いわゆる「一書」を記している。『日本書紀』で記されている「素戔鳴尊の八岐大蛇退治神話」の後には6つの「一書」が追記されている。本稿が注目するのはその第4の一書である。

『日本書紀』の本文によれば、素戔鳴尊は天上から追放され、独りで出雲国の簸之川に着いた。『日本書紀』に記される「簸之川」は現在の斐伊川を指すと思われる³。つまり、天上から降りた素戔鳴尊は単身で出雲国(島根県東部)の斐伊川に到着した。

天上から斐伊川に着いた素戔鳴尊は上流を進み、八岐大蛇を退治した。但し、第4の一書によれば素戔鳴尊は天上から新羅に降り、朝鮮半島経由で斐伊川に到着した。この「一書」は次の様に始まる。

* 国際文化学科講師

是時、素戔鳴尊、帥其子五十猛神、降到於新羅國、居曾尸茂梨之處。乃興言曰、此地吾不欲屋、遂以垣土作舟、乘之東渡、到出雲國簸川上所在、鳥上之峯。⁴

従来の解釈は「卜部兼方本」という写本を基にし、素戔鳴尊は勇猛な神と一緒に新羅にあるソシモリというところに降りるとの意味をとる。しかし、素戔鳴尊はそこを気に入らず、粘土で船を作り、出雲国に行くという⁵。

これだけでは素戔鳴尊は、なぜわざわざ新羅經由で出雲国に行ったのか分からない。そこで、本稿では新しい視点でこの部分を解釈する。

II. Silver の解釈方法

「黄金の羊の毛皮神話」というギリシア神話で英雄イアソンはアルゴ号という船に乗り、黄金の羊の毛皮を手に入れるために旅に出る。この神話はギリシア神話の中でも比較的古い神話であり、ホメロスにとってさえ、これは既に古い神話だった。それでも、現在まで残り、この神話を語っている様々な資料の内容はだいたい一致している⁶。

「黄金の羊の毛皮神話」でイアソンは王の命令を受け、黄金の羊の毛皮を探しに出、黒海の向こう側で王が求めたその黄金の羊の毛皮を見つけ、これをギリシアに持って帰国した。しかし、これ以上は商品の交換などの貿易に関する情報は出てこない。そこで、Silver がどの様に「黄金の羊の毛皮神話」が長距離貿易を描いていると解釈したのかみよう。

この神話ではイアソンは羊の多い西ギリシアにあったイオルコス都市国家の王の命令を受け、黄金の羊の毛皮を探しに行った。そこで、イアソンは船でコルキスという黒海の東端にある豊かな地方に航行した。彼は途中でリムノス島という女性しか住まない島に寄った。なぜ女性しか居なかったのかという不思議な問題点について考慮した Silver は興味深い仮説を紹介する。それは、この島の女性達は非常に臭く、男性は皆逃げたため、この島には女性しか住んでいなかったという説だ⁷。これには理由がある。紀元前1000年以上前から東地中海に住んでいたフェニキア人はアクキガイから紫色の染料を取り出していた⁸。この染料は東地中海地域において非常に価値の高い染料である。Silver の仮説によれば、リムノス島に住む女性達はフェニキア人同様アクキガイから染料を取り出していた。アクキガイからこの染料を取り出す職人（つまり、リムノス島の女性も含め）には強烈な臭いが染み付いていた。そんな理由から、男性が居なかったというのだ。

Silver の解釈はここでとどまらない。氏の説によれば、イアソンはこの島で、西ギリシアからアルゴ号で運んだ羊毛（羊の毛皮）を紫色に染めてもらい、この高級な色づきの羊毛をコルキス地方に持って行った。そしてこのコルキス地方で、イアソンは紫色に染まった羊毛を黄金と交換し、帰り道でリムノス島の女性に染料代を黄金で払い、帰国後イオルコスの王に残りの黄金を献じた⁹。

従来の「黄金の羊の毛皮神話」の解釈によれば、イアソンはギリシアから何も持たず、コルキス地方から黄金の羊の毛皮をギリシアに運び込んだとされているが、Silver の説は「黄金の羊の毛皮」に新しい意味を与えている。「羊の毛皮」（＝羊毛）は羊の多い西ギリシアから輸出した商品で、「黄金」はギリシアに輸入した商品である。つまり、「黄金の羊の毛皮神話」は西ギリシアと黒海の東端との長距離貿易を描いている神話だと Silver は論じている。

ここで、第4の一書に戻ろう。

III. 第4の一書と長距離貿易

前に引用した第4の一書の幾つかのキー・ポイントから論じたいと思う。

① 五十猛神

まず、第4の一書では素戔鳴尊は本文と異なり、独りで天上から降りた訳ではない。素戔鳴尊は「五十猛神」を率いた。この第4の一書を読み解くにおいて素戔鳴尊が率いた「五十猛神」は重要である¹⁰。

『万葉集』に記される「五十」は多くの場合に借訓として使われている。例えば、「五十母不宿二」＝「眠も寝ずに」（9・1787）¹¹。従来の解釈は第4の一書の「五十」を「斎」・「忌」、或いは「神聖」とする¹²。しかし、本稿はこれを数字のまま、「多数」の意味にとりたい¹³。

この第4の一書の神話を人と人との交流を描いた神話と読む本稿では、第4の一書が語る神話の具体像として「猛神」を「猛者」として解釈する。「猛者」は「猛士」を指すので¹⁴、「五十猛神」の意味は「勇猛な兵士」になる。

従って、「五十猛神」は「多数の勇猛な兵士」として解釈できよう。

② 新羅國

次に、「降到於新羅國、居曾尸茂梨之處」の部分で「新羅」が登場する。『日本書紀』が記述する全ての地名がどこを指すかは必ずしも明確ではないが、第4の一書で、『日本書紀』は初め

て海外を登場させる¹⁵。『出雲国風土記』では編集者にとって大事な物が比較的前に記されている¹⁶。このことを参考にすれば、ここに新羅が登場することは『日本書紀』の編集者である日本中央政府にとっての朝鮮半島の重要性を示していると思う。

「新羅」を「新羅王国」として理解する解釈もある¹⁷。しかし、『日本書紀』が編集された奈良時代の新羅は朝鮮半島の中部・南部を占めていた。とすれば第4の一書で登場する「新羅」は大きく「朝鮮半島中部・南部」を示しているはずだ。

古代朝鮮語の分析では、「新羅」「曾尸茂梨」の名称について様々な説がある¹⁸。「金」と関係ある地名という興味深い説もある¹⁹。

但し、古代朝鮮語説については不明確な点が多々あるため²⁰、本稿ではこれ以上これらの説を取り上げない。その代わりに『日本書紀』で使っている漢字の意味に注目する。

③ 曾尸茂梨

この地名の「曾尸」の解釈は困難である。多くの意味の内、「曾」は「重ねる」・「高い」として理解できる。注目すべきは「層」もこの意味を持つ点である。そう考えると、「曾」と「尸」は「層」と記す形が単に別々に写されているだけで、本来は「層」と記されるべき漢字ではないか。本稿の底本である「乾元本」は名前の通り、乾元二年（1303）、一四世紀の初め頃に写された²¹。信頼性の高い写本だが、『日本書紀』が編集された養老四年（720）から約600年も離れているので、転写過程の誤字の可能性もある。つまり、「曾尸」は「層」が2字にわかれたもので、「層」が正字だとも見れるだろう。そう読めば、「降=到於新羅國-」の六字と「居=曾尸茂梨之處-」の六字は漢文として綺麗なマッチングとなる。

曾尸茂梨（層茂梨）という地名の後半である「茂梨」は解釈しやすい。「茂」は「繁る」・「豊か」の意味がある。「梨」も同様な意味を持ち、「もろもろ」・「そろそろ」（穀物の穂が出そろそろ）を意味する²²。

以上の様に「層茂梨之處」を見ると「豊かさが重なるところ」になる。従って、先述の古代朝鮮語説「金があるところ」と、本稿の説「豊かなところ」は似た意味となる。

これで、「是時、素戔鳴尊、師=其子五十猛神-、降=到於新羅國-、居=曾尸茂梨之處-」の部分解釈できよう。「素戔鳴尊は天上から降り、多くの勇猛な兵士を新羅にある豊かなところに率いた」の意味になる。

④ 乃興言曰、此地吾不_レ欲_レ屋

従来の解釈に従い、最後の字を「居」とすると、この部分は読みやすい。「素戔鳴尊はここに居たくないと言いつた」²³。しかし、このまま読むと意味を成しにくいと思う。素戔鳴尊は何のために多くの兵士を率い、わざわざ海外にある豊かなところまで行ったのか。前述の解釈だと素戔鳴尊は何も目標なく、何もせずに豊かである新羅まで行った。これは受け入れにくい解釈だと思う。素戔鳴尊はこの旅で何かしようとしたのではないか。これは『日本書紀』で描かれている初の「海外旅行」である上に、目的地は豊かさが溢れるところで、素戔鳴尊はここに多くの兵士を率いて行った。このことから、第4の一書にはもっと深い意味があり、素戔鳴尊はこの旅で何かを目指していたと思われ、この神話の短編は目的のある長距離交流の事実を描いていると考えるのが自然だと思う。

奈良時代前半に編集された『日本書紀』の神話はいつの時代を描いているのか明らかではないが、しかし、既に縄文時代晚期より日本列島側から朝鮮半島に対して交流があった²⁴。この交流を行っていた人々の目的は商品の交換だったはずだ。つまり、この交流の基本は貿易だったと言ってもよからう。最初の頃は品物の交換の形だったろうが、弥生時代になると品物の交換の形も、市場的な商業も存在したと判断できよう。ここで Silver の解釈方法を参考にしながら、第4の一書の中に長距離貿易の可能性を探っていきたいと思う。

日本列島と朝鮮半島の間に行われた商品交換は歴史的な事実からも読める。その商物のうち、兵士は大切な「品」だった。朝鮮半島南部に繁栄していた無文土器文化が朝鮮海峡を渡り、日本の弥生時代を誘発してから、新羅が朝鮮半島を統一するまでの間、朝鮮半島での戦争は断続的に続いていた。当然の結果、朝鮮半島での兵士の需要は常々大きかった。史料によく現れる史実の一つは百済国のことで、百済国は繰り返し倭から兵士を要請していた²⁵。三国時代に限らず、その前にも日本の様々なチーフ（chief・chieftain＝地域の中心勢力の首長）が朝鮮半島にあるチーフダム（chiefが支配する地域）に兵士、或いは捕虜を送り日本列島に需要があった商品と交換したことは十分に考えられる²⁶。

⑤ 遂以=埴土-作_レ舟

先述の④と同様に従来の解釈に従い、三つ目の字を「埴」とするならば、この部分の読みも難しくない。「素戔鳴尊は埴土で船を作った」という意味になる。

「埴土」は「はに」又は「ねばつち」、即ち、陶器・瓦の材料である土である²⁷。しかし、粘土か

ら船を作る文明・民俗は世界中のどこにもなかろう。船を作る一般の材料は木で、草や皮を最良とする文明・民俗も存在した。しかし、粘土で作られた船はない。日本の古墳で見つけられる舟形の埴輪を思い出すのだが、これはあくまでも模型で、形は現物と似ているかも知れないが、実際の船の材料は違うはず。これらのことから、素戔鳴尊が新羅で粘土を材料として、船を作ったということは考えにくい。そこで、従来の「埴土」の解釈に新しい意味を探した。「埴土」は船自体ではなく、素戔鳴尊が船に乗せた物を指すと考えてはどうか。つまり、土器を指すと考えるのである²⁸。

これにより、「素戔鳴尊は新羅の豊かなところに行き、兵士を土器と交換してから、遂に船を作った」という意味に読めるだろう。兵士と鉄器の交換は史料でよく見られる。日本各地で朝鮮系の土器が多く発掘されていることから²⁹、兵士と土器の交換も充分考えられると思う。北九州と畿内ほど数は多くはないが、出雲では他の地方よりたくさんの朝鮮系の土器が見つけられている³⁰。

写本には幾つかの問題点がある。「乃興言曰、此地吾不_レ欲_レ屋、遂以_二埴土_一作_レ舟」の部分では2点見られる。「ト部兼方本」ではこの部分の「屋」を「居」と書き、「埴」を「埴」と書く。これらの字をくずし字とすると「居」と「屋」、又「埴」と「埴」は非常に似ているので、³¹「乾元本」の「屋」と「埴」は誤字の可能性があると同時に、これらの字は正字だとも考えられる。本稿は「乾元本」を底本とするので、「屋」と「埴」を正字として考えよう。

「乾元本」の「乃興言曰、此地吾不_レ欲_レ屋、遂以_二埴土_一作_レ舟」はそのままではなかなか上手く解釈できないが、「欲」と「屋」のあいだにまた「作」を入れるならば、新しい解釈が可能になる。

まず、「素戔鳴尊はここで屋を作りたくないと言い、遂に（その屋の）埴土で船を作った」という意味になる。しかしながら、「屋」は「家」を指し、「埴土」（ついで）は「築地」（ついで）を指す場合がある³²。従って、正統ではない読みだが、「素戔鳴尊はここで家を作りたくないと言い、遂にその家の築地で船を作った」として解釈できる。築地の材料の1つは木材であるため、船の材料にもなる。普段、築地には瓦が被されている。素戔鳴尊はこの瓦を船に乗せた。

つまり、以上の解釈によって商人である素戔鳴尊は兵士を瓦に交換し、この瓦を船に乗せたと読んではどうか³³。

⑥ 東渡、到出雲國簸川

この部分の解釈は問題なかろう。「素戔鳴尊は朝鮮半島から出航し、日本海を渡り、出雲国の斐伊川に着いた。」

そこで神話から地理と遺跡に話を移そう。

IV. 斐伊川下流域

① 斐伊川の川筋

斐伊川は毎年多くの土砂を運ぶ。この影響で宍道湖の西端にある広い平野が形成された。この沈泥の溜まりで17世紀の前半に斐伊川は川筋を変えた³⁴。今日、斐伊川は宍道湖に注ぐが、16世紀以前は神西湖経由で直接日本海に入った。

図1 出雲の現在地名



この地図の元は国土地理院の25000分の1の地図である。ここに記されている海拔数字を参照しながら、宍道湖と神西湖の湖岸や斐伊川の川筋を描き換えた。見やすい様に、斐伊川と赤川の川筋を濃く書き込んだ。

『日本書紀』と同時期に編集された『出雲国風土記』では、古代の斐伊川の川筋を辿ることができる。『古事記』『日本書紀』によれば、斐伊川の上には鳥髪・鳥上之峯がある。現在の船通山である³⁵。『出雲国風土記』の仁多郡の山のリストに鳥上山が記されている。以下の引用は『出雲国風土記』からである³⁶。

鳥上山。郡家東南卅五里。〈伯耆與_二出雲_一之境。有_二塩味葛_一。〉

つまり、上流に鳥上山がある斐伊川は出雲国の東南端にある。『出雲国風土記』で斐伊川の上流は「斐伊川」又は「横田川」とも呼ばれる。

横田川。源出郡家東南卅五里鳥上山北流。所謂斐伊河上。〈有年魚少々。〉

斐伊川は仁多郡を北流し、大原郡に入る。斐伊川は大原郡の川のリストにもまた記されている。ここで斐伊川の中流位置・川筋も確認できる。(図1参照)

斐伊川。郡家正西五十七步。西流入出雲郡多義村。

大原郡家は木次町里方の里熊付近にあったと思われる³⁷。現在、里熊の西側に斐伊川は位置し、まもなく西に流れ、出雲郡に入る。

出雲郡の川のリストで斐伊川の川筋は水源から再び細かく記される。ここで斐伊川は「出雲大川」として記述される。その下流の川筋を覧よう。

出雲郡堺多義村、經河内出雲二郷、北流更折西流、即經伊努杵築二郷、入神門水海。此則所謂斐伊河下也。

神門水海は現在の神西湖である³⁸。神門水海は神門郡の池のリストに記されている。

神門水海。郡家正西四里五十步。周卅五里七十四步。裏側有鯰魚鎮仁須受枳鮒玄蠣也。即水海與大海之間在山。長廿里二百卅四步、廣三里。此者意美豆努命之國引坐時之綱矣。今俗人號云菌松山。

後で意美豆努命の「国引」に戻るが、以上の通り『出雲国風土記』では神西湖と日本海（大海）の連絡道の記述がない。しかし、神門水海に入った大量の水はどこから出なければならない。おそらく、菌松山の北側に海までの連絡路があったと思われる³⁹。

地理的に『出雲国風土記』が説明する様に、朝鮮半島から出雲国の斐伊川に着いた素戔鳴尊は先ず神西湖（神門水海）に着き、そして斐伊川の下流に入った。本稿になぜ斐伊川の川筋を取り上げる必要があるかというと、このルートを通った素戔鳴尊は日本古代史に比類がないほど重要な3つの遺跡を通過したということを記述する為である。

② 斐伊川下流域

古代の斐伊川の下流を溯ると、先ず神西湖から東に進み、そして南に曲がり、現在の川筋に入る。古代に限らず、現在もこの地点から斐伊川を溯ろうとすれば、出雲市と仏経山のあいだに進み、僅か約三キロ南に続けてからまた東に曲がり、仏経

山の南側を沿う。東に進むと加茂町の境を越える。加茂町の堺から見るとここで斐伊川は南から流れてくる。そして、ここで赤川という枝川は東から斐伊川に入る。

図2 斐伊川下流域の遺跡



この様に描いた斐伊川下流には本稿の冒頭で触れた3つの遺跡がある。西から見れば、先ず、出雲市南部の西谷墳墓群、そして仏経山の東側にある荒神谷遺跡、最後に赤川の北にある加茂岩倉遺跡である。(図2参照)

これらの遺跡は弥生時代中期の末から弥生時代後期までの斐伊川下流域の勢力を示す。周知の様に荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡はそれぞれ日本の最も大量の銅剣、銅鐸の遺跡である。この2つの遺跡では銅剣358個・銅鐸45個・銅矛16個が発見された⁴⁰。比類のない遺跡である。この2つの遺跡には様々な共通点があることから、荒神谷に青銅器を埋めた団体と加茂岩倉で銅鐸を埋めた団体は同じチーフダムに属した人々であったと考えられる⁴¹。青銅器で権力を証明した彼らのチーフの墓は確認できないが、このあと少しだけ時代が下ると、斐伊川下流域のチーフダムの巨大な墳丘墓で権力を証明したチーフの墓を確認できる。西谷墳墓群には日本海側の最も大きな四隅突出型墳丘墓がある。1つだけではなく、西谷には6つの大きな四隅突出型墳丘墓がある⁴²。

③ 海上ルート

弥生時代中期の末から弥生時代後期にかけて、西出雲の斐伊川下流域に巨大な勢力のあるチーフダムが存在した。この史実を語っている3つの遺跡はこの地域に並んでいる。この勢力の基盤がどこにあったのかは古代出雲の謎の1つである。

北九州・吉備・畿内には広い肥沃な野原がある。しかし、弥生時代の西出雲にはこれはなかった。実は弥生時代の西出雲には特別な産物はなかった。出雲では早い段階から鉄鋼業が始まったと思われるが⁴³、この技術は古墳時代になってから出雲に入った⁴⁴。中世まで下ると西出雲のさらに西にある石見銀山から大量の銀が採られ始めるが、古代には

この銀の泉は知られていなかった様だ。さらに明治時代に下ると出雲で大量の銅が採れる様になったが⁴⁵、弥生時代の出雲では銅鉾山は見つけられていないため⁴⁶、弥生時代にはこの銅は知られていない財源だっただろう。

日本海は今日に至るまで豊かな海で、『出雲国風土記』によれば西出雲のアワビ（出雲郡）とノリ（神門郡）は優れていたという。但し、この海産物を青銅器には交換できなかっただろう。

つまり、西出雲の産物では荒神谷と加茂岩倉の青銅器の存在を説明できない様だ。しかし、地理の面から見るとこの問題が解ける。

斐伊川下流域は地理的形上に特徴がある。日本海側沿いに宍道湖の様な「内海」は他に存在しない。幾つかの小型の潟があるが、中海・宍道湖ほど広大な「内海」はない。宍道湖は東で松江市を通る大橋川経由で中海と日本海と繋がっている。

『出雲国風土記』は宍道湖・大橋川・中海を1つの海として描いている。これら全体を「入海」と称している。『出雲国風土記』と同様に「入海」を見ると、これは東日本海と西日本海とのあいだにある非常に航行しやすいルートになる。今日宍道湖は浅く、風ですぐに大きな波が立ち上がる。しかし、この浅さは17世紀からの斐伊川の土砂の持ち込みの結果である。弥生時代の中海・大橋川・宍道湖は航行において平静且つ最適なルートであったと考えられる。

図3 斐伊川下流域と海上ルート



「入海」を航行ルートとして考慮すれば、下記の通り推測できる。

西日本海から船で出雲・斐伊川下流域にきた人、又は素戔鳴尊の様に朝鮮半島から来た船頭は神西湖を通り、斐伊川を溯り始めた。立派に聳える仏経山の西北端に着いた彼らは船から降り、上陸した。

当時の「入海」西端は斐伊川と僅か数キロしか離れていなかった。従って、東日本海から「入海」経由で来た船頭らは「入海」西南端に目印とする仏経山へ向かって操舵し、この山の北側に到着し、商品を陸揚げした。（図3参照）

この考えを取れば、弥生時代中期の末・弥生時代後期に斐伊川下流域は日本海側の最も重要な長距離貿易の「市場」の1つだったという可能性が高まる。東日本海・西日本海・朝鮮半島・瀬戸内海の4つの地域の交流は斐伊川下流域で結ばれた。無論、この他にもこれらの地域にとって違うルートもあった（例えば、朝鮮半島→北九州→瀬戸内海）。しかし、これらの地域を結んだ「市場」の1つは斐伊川下流域にあったと考えられる。この史実は『日本書紀』の「素戔鳴尊の八岐大蛇退治神話」第4の一書にも見られると思う。

以上の様に論じると、西出雲の最も大切な「産物」はこの地域の地形だったと言えよう。弥生時代中期の末から西出雲のチーフは長距離貿易で資産を貯め、荒神谷と加茂岩倉で発見された青銅器は彼らが長距離貿易で得た遺産のおかげで保有できた産物であると考えられる。弥生時代後期に入ると西出雲のチーフは自らの権威を示すための「品」を青銅器から墳丘墓へと好みを移した。彼らの墳丘墓は四隅突出型墳丘墓といい、日本海側沿いの広い範囲に分布している。その内、西出雲にあるものは最も大きい。荒神谷遺跡の青銅器・加茂岩倉遺跡の銅鐸・西谷の四隅突出型墳丘墓は巨大な勢力を表示する。この勢力の元は長距離貿易にあったと言えるだろう。

この弥生時代中期の末から弥生時代後期にかけての西出雲勢力が長距離貿易から生まれてきたと論じようとする本稿の最も大きな弱点は、ここで推定する貿易の遺物の少なさであるかもしれない。但し、少ないことは認めても、全くない訳ではなく、長距離貿易を表示する遺物はある。西谷では吉備から運ばれた大型の土器も、北陸系の土器も見つかっている。西谷の西にある古志本郷遺跡では弥生時代後期とされる朝鮮系土器も見つけられている⁴⁷。出雲平野の周りには古志本郷遺跡だけではなく、ほかの環濠集落もあった⁴⁸。ここでは弥生時代の長距離貿易を示す遺物は発見されていないが、分離政策を持っていた社会が存在していたことを示している。この様な社会にとって長距離貿易は欠かせないことであるので⁴⁹、そこではこの様な貿易があったと推測できる。

斐伊川が毎年運ぶ土砂は徐々に宍道湖西端の景色を変形させた。それは次第に西出雲にある出雲平野へ広がっている。この変形の影響で貿易の跡が見つけられにくくなったのかも知れない。

仏経山の付近で弥生時代の長距離貿易の遺跡が見つからなくとも、宍道湖の海岸沿いに「市」が存在したのは『出雲国風土記』が語っている。後述の文章の引用はその「市場」の存在を語ることになる。奈良時代の出雲国の話だが、意宇郡の忌部神戸に温泉があった。

即川邊出湯。出湯所_レ在、兼_二海陸_一。仍男女老少、或道路駱驛、或海中沿_レ洲、日集成_レ市、繽紛燕樂。

ここで記されている「湯」は現在の玉造温泉である⁵⁰。つまり、玉造温泉の北端、宍道湖の海岸近くに古代から「市場」ができていた。もう一つの例を述べよう。出雲国衙の少し北にあった島根郡の朝酌促戸渡の記述から引用する。ここには連絡船があり、様々な魚も捕れた。

大小雑魚、濱藻家閭、市人四集、自然成_レ塵矣。

忌部神戸と朝酌促戸渡の記述から判断できる様に奈良時代の宍道湖沿いに人々が四方八方から集まり、「市場」が形成された。弥生時代中期の末から弥生時代後期まで『出雲国風土記』で描かれている様に様々な人が遠くから来て、「入海」の海岸で集まり、商品の交換をしたと考えられる。『出雲国風土記』が編集された奈良時代には出雲の勢力の中心点は出雲の東にあった。だから、「市場」は宍道湖の東端にあったのだろう。しかし、本稿が取り上げている弥生時代後半の出雲の勢力中心点は西出雲にあった。だからこの時代では、「市人」は出雲の勢力の中心点であった上に、日本海側の交流の中心点でもあった西出雲・出雲平野南端・宍道湖西端で集まり、「市場」を形成したと十分に考えられる。

ここで、本稿の仮説を紹介したい。第4の一書により、新羅國から出航した素戔鳴尊は東を渡り、出雲國の簸川に着いた。この簸川の上流には鳥上之峯があった。朝鮮半島からこのルートを通った素戔鳴尊は必ず西出雲または斐伊川下流に着いた。ここには3つの比類のない遺跡がある。それら荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡・西谷墳墓群は明らかに西出雲にあった勢力を表示している。これらの遺跡は弥生時代中期の末・弥生時代後期の初め（荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡）と弥生時代後期（西谷墳墓群）、西暦で言うところの凡そ1世紀の初めから3世紀の初めまでの200年間に当たる。それから更に時代が下ると本稿が推定する出雲平野の南端にあった「市場」の重要性が低くなる。古墳の数・形・大きさから判断するに西出雲の勢力が衰え、代わりに古墳時代前期の東出雲の方が勢力が強いチーフダムとなった。3世紀に入り、古墳時代が始まると出雲にあった勢力の中心点は東出雲に移った⁵¹。

素戔鳴尊が朝鮮半島から瓦（或いは土器）を運び込んだ弥生時代の商人であったことを論じようとする本稿は、「市場」の存在を重視する。弥生時代にも日本海側沿いで商品の交流が行われたことは確かである⁵²。これで、上述で論じた通り、素

戔鳴尊が目指したのは宍道湖の西端、いわゆる出雲平野の南端に存在した「市場」であったはずだ。

地理的な面で見ると出雲平野の南端は「市場」として最適な場所である。「市場」がなす最も重要な要素は地形である。長距離貿易に欠かせないのが交通で、それは地形によって「通路」が導かれ、その「通路」の「終点」では市場がなしやすい。その「終点」においては運搬方法が変わり、商品の積み替えが行われるからだ。北欧にある1つの例を述べると北独のヘーゼビューが代表的な例になる。ヘーゼビューは北海とバルト海がほぼ接続する地点にある。西から南東北海に並んでいるフリジア諸島に沿って「通路」（海）を進んだ商人はこの「通路」の「終点」であるヘーゼビューで東から来たバルト海側の商人と品物の交換を行った。ここは、北海から運ばれた商品の積み替えに必要な場で、商品交換にとって最適な場所だった。これらの理由で、ヘーゼビューは北欧の大きな市場になった⁵³。日本の場合は瀬戸内海はこの様な「廊下」の1つであり、その「終点」は畿内である。もっと小型なスケールでは「入海」もこの様な「廊下」の1つで、その「終点」は出雲平野の南端にある。

どんなネットワークも、一度中心点ができたら、ここに多くの参加者が集まってくる⁵⁴。同様に、市場も一度できたら、多くの商人がそこに集まってくる傾向が強い。以上の様に考えると、出雲平野の南端に大きな「市場」が存在していた可能性は高いだろう。

出雲に着いた商人である素戔鳴尊は斐伊川に入った。なぜ斐伊川に入ったかは、運び込んだ商品を交換するのに、最も大きな「市場」に行きたかった為だ。斐伊川下流域に「市場」があったからこそ斐伊川に入ったと思う。本稿はこの様に考え、第4の一書は弥生時代中期の末・弥生時代後期に行われた出雲の長距離貿易を描いている神話であることを論じたい。

8世紀に編集された『日本書紀』の神話の中に、その編集の時期より更に600年前の史実が描かれているということが本当にあり得る解釈かどうかに対して疑問を感じる読者も何人か居ると思う。但し、出雲は弥生時代中期の末から奈良時代にかけて独特な伝統を守っていた地域だったのは明らかなことである。弥生時代中期の青銅器・弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓・古墳時代前期の方墳・古墳時代後期の前方後方墳・飛鳥時代と奈良時代の出雲国造や出雲神話などの特徴は出雲には断続的にユニークな伝統があったことを表示している。この伝統の中に第4の一書に見られる話はずっと伝えられることは不可能だと思わない。

従って、出雲平野の南端に具体的に長距離貿易を表示する遺跡の少なさは認めても、本稿の仮説を否定できなからう⁵⁵。

V. 『出雲国風土記』の「国引き神話」

先ほどの神門水海の部分を引用したとき、意美豆努命の国引きが出てきた。この記述は『出雲国風土記』の最も壮大な神話である「国引き神話」と繋がっている。

『日本書紀』が編集された13年後、『出雲国風土記』も完成した。この風土記の「国引き神話」は『日本書紀』の「素戔鳴尊の八岐大蛇退治神話」第4の一書と幾つもの共通点がある。

「国引き神話」は「序論」と「終結」とそのあいだにある4つの部分で成っている。その「序論」と第1の部分は以下の通りである。

所_二以號_一意_二宇_一者、國引坐八束水臣津野命語、八雲立出雲國者、挾布之稚國在哉。初國小所_二作_一。故將_二作縫_一詔而、栲衾志羅紀乃三埼矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而、童女胸鉏所_二取而_一、大魚之支太衝別而、波多須々支穗振別而、三身之綱打挂而、霜黑葛闇々耶々爾、河船之毛々曾々呂々爾、國々来々引來縫國者、自_二去豆乃折絶_一而、八穗爾支豆支乃御埼。以此而、堅立加志者、石見國與_二出雲國_一之境有、名佐比賣山是也。亦持引綱者、藺者長濱是也。

八束水臣津野命は出雲国は狭すぎると思い、日本海を見渡した。志羅紀（新羅）の三埼を見、「國之餘有」と発言した。つまり、八束水臣津野命によれば新羅に余っている国があった。そこで、八束水臣津野命は鉏で志羅紀から国を分け、綱で引っ張った。これにより、国は河船の様に日本海を渡り、出雲国に運ばれた。八束水臣津野命は新羅から引っ張られた国を出雲国の北西に縫いつけた。それを支豆支乃御埼という（現在の日御碕で、出雲平野の北端にある）。八束水臣津野命が利用した綱は藺之長浜になった（現在の長浜で、出雲平野の西端にある）。この綱は佐比売山で結ばれた（現在の三瓶山で、南から出雲平野を見渡す）。

「国引き神話」の「国」又は「河船」と「素戔鳴尊の八岐大蛇退治神話」第4の一書の「垣土」又は「船」は同じものではあるまいが、両方の神話は新羅と出雲との交流を示していると思う。両方の神話では出雲の力のある神は海を越えて新羅から出雲に何か運び込んだ。そして、両方の神話は新羅と出雲平野を結ぶ。これらの共通点は朝鮮半島と斐伊川下流域の密接な関係を強調するとは考えられない。

むすびに

「黄金の羊の毛皮神話」というギリシア神話で英雄イアソンは黄金の羊の毛皮を手に入れるためにアルゴ号に乗り、旅に出る。この神話には「貿易」の言葉はもちろん、商品の交換の場面もないのに、Silverはこの神話はギリシアの長距離貿易を描いていると論じている。

本稿は同様に古代の長距離貿易を『日本書紀』に記されている短い神話の断片の1つを基に解釈しようとした試みである。従来『日本書紀』の「素戔鳴尊の八岐大蛇退治神話」第4の一書で素戔鳴尊は五十猛神を率い、新羅に行き、そこで何もせず、埴土から船を作って、出雲国に行ったという解釈が通説とされていた。しかし、本稿はこの神話に新しい意味を与えようとした。素戔鳴尊は多くの兵士を新羅の豊かなところに率いた。そこで兵士（或いは捕虜）を瓦（或いは土器）に交換した。こうして手に入れた商品を船に乗せた。そして、素戔鳴尊はこの商品を日本海側の最も巨大な長距離貿易の「市場」の1つであった西出雲の斐伊川下流域に運んだ。恐らく、更に貿易をするためと考えられる。

弥生時代中期の末から弥生時代後期にかけて、遺跡や地理的な形状からも、斐伊川下流域の重要性は見られる。『日本書紀』の「素戔鳴尊の八岐大蛇退治神話」第4の一書も『出雲国風土記』の「国引き神話」もこの推理を裏付けている。

本稿が提示したこの新しい解釈は論駁されるかもしれない。しかし、怯まず新たな思想を生み出すのは進歩的な研究にとって絶対に欠かせないことであると信じ、ここに実行した。ここで述べた観点を日本の様々な神話に適用すれば、これらの神話から新たな史実の姿を引き出せるかもしれない。今後神話学から日本古代史の様々な史実を論証する可能性が広がる。少なくとも筆者は、これを期待している。

附記

2008年の真夏に國學院大學の青木周平先生と食事に出かけた際、本稿で取り上げている考えについて話した。幸い、この考えについて先生より面白いと思っていただき、原稿を読んで頂いた。以前から青木先生には様々な原稿を読んで頂き、読み終わったときいつも「もっと丁寧に書いてください」と言われていた。つまり、「もっと分かりやすく書いてください」ということだ。この「丁寧」の言葉には絶えず周囲の人を大切にしていた先生の思いやりや温かい心がよく反映していると思う。本稿は青木先生が常に望まれていたほど「丁寧」に値しているか定かではないが、先日（11月

11 日)、僅か 56 歳で突然ご逝去された先生にこの小論を捧げる。

また、ご多忙にもかかわらず本稿をご校閲くださった國學院大學鈴木靖民先生、島根県埋蔵文化財調査センター内田律雄先生へ衷心より謝意を表すものである。

¹ その幾つかの例を述べよう。勝部昭『出雲国風土記と古代遺跡』山川出版、2005 年、93～96 頁・角林文雄『『日本書紀』神代卷全注釈』塙書房、1999 年、324 頁・西郷信綱『出雲国風土記国引き考』リキエスタの会、2001 年、一九頁・藤岡大拙「出雲と日向」島根県立八雲立つ風土記の丘『古代の島根と南九州』島根県立八雲立つ風土記の丘、1994 年、1 頁・後藤勝実・村岡逸朗「『出雲国風土記』『延喜式』にみる出雲の葉草」昭和漢方生薬ハーブ研究会『古代出雲の葉草文化』出帆新社、2000 年、265 頁・森公章「出雲地域とヤマト王権」稲田孝司・八木充『新編古代の日本④—中国・四国』角川書店、1992 年、175 頁・内藤正中『山陰の日朝関係史』報光社、1993 年、11 頁・和久利康一『古代出雲と斐伊川』新泉社、1995 年、84 頁。

² Morris Silver 「The commodity composition of trade in the Argonaut myth」Morris Silver『Ancient economy in mythology: east and west』Rowman & Littlefield、1991 年、241～282 頁。

³ 山本清『日本歴史地名大系 33—島根』平凡社、2001 年(オンデマンド版)、52 頁・加藤義成『修訂出雲国風土記参究』今井書店、1997 年(改訂四版二刷)、236 頁・関和彦『『出雲国風土記』注論』明石書店、2006 年、858 頁。

⁴ 引用文は野間光辰他『天理図書館善本叢書と書之部第一巻古代史籍集』八木書店、1972 年、158～159 頁により。本文の写本は「乾元本」である。以下同様。

⁵ 坂本太郎他『日本書紀』岩波書店、1998 年(新装版第六印刷)、126～127 頁・小島憲之他『新編日本古典文学全集②—日本書紀①』小学館、2006 年(第 1 版第四刷)、98～99 頁。

⁶ Peter Green『The Argonautika: the story of Jason and the quest for the golden fleece』University of California Press、1997 年、21～22 頁。

⁷ Silver、1991 年、249～251 頁。

⁸ Maria Eugenia Aubet『The Phoenicians and the West』Cambridge University Press、2001 年(2 版)、17・35 頁。

⁹ Silver、1991 年、243～251 頁。

¹⁰ ちなみに、出雲国の近くに「五十猛神」と関連する地名がある。それは石見国(島根県西部)の大田市五十猛町という漁師集落である。この周辺には五十猛神社や韓神新羅神社がある。但し、明治 22 年(1889)以前は、この集落の名前は磯竹村として表記されていた(竹内理三『角川日本地名大辞典』角川書店、1979 年、723 頁)。

¹¹ 小島憲之他『新編日本古典文学全集⑦—万葉集②』小学館、1995 年、438 頁を参照。

¹² 坂本他、1998 年、126 頁は「齋」・「忌」。角林、1999 年、324 頁は「神聖」。

¹³ 小島他、2006 年、98 頁は同意。

¹⁴ 諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店、1971 年(縮写版第三刷)、巻 7・713 頁。

¹⁵ 大野達之助『六国史索引①—日本書紀索引』吉川弘文館の参照。

¹⁶ アンデス・カールキピスト『Elusive treasures: natural resources in Izumo fudoki』Acta Universitatis Gothoburgensis、2005 年、93 頁。

¹⁷ 山田宗睦『日本書紀史注巻第一』風人社、1997 年、465 頁。

¹⁸ 前田富吉『日本語源大辞典』小学館、2005 年、628 頁・斉藤忠「新羅文化と日本」有光教一他『古代の日本と韓国⑤—古代の新羅と日本』学生社、1990 年、9～10 頁。

¹⁹ 坂本他、1998 年、126～127 頁・小島他、2006 年、98～99 頁。

²⁰ John R Bentley 「The origin of man'yōgana」『Bulletin of SOAS』64(1)号、2001 年、61 頁。

²¹ 石崎正雄「解釈」野間光辰他『天理図書館善本叢書と書之部第一巻古代史籍集』八木書店、1972 年、IV 頁。

²² 諸橋、1971 年、巻 6・378 頁、巻 12・1079 頁。

²³ 坂本他、1998 年、126 頁・小島他、2006 年、49 頁。角林、1999 年、324 頁

²⁴ 高倉洋彰『金印国家群の時代』青木書店、1995 年(第 1 版第 1 発行)、25 頁。

²⁵ 森公章『戦争の日本史①—東アジアの動乱と倭国』吉川弘文館、2006 年、96 頁・鈴木靖民「倭国と東アジア」鈴木靖民『日本の時代史②—倭国と東アジア』吉川弘文館、2002 年、12～16 頁・William Wayne Farris『Heavenly warriors』Harvard University Press、1992 年、14～38 頁。

²⁶ 因みに、多くの日本古代史の研究者は「クニ」という言葉を使うが、これは非常に曖昧な用語のため、本稿では「チーフダム」という言葉を利用する。厳密に言えば「チーフダム」にも様々な定義があるが、「クニ」より極めて的確な用語であると思う。そして、「チーフダム」に合わせ、そ

の主張を「チーフ」と名付ける。(Timothy Earle
『The evolution of chiefdoms』Timothy Earle
『Chiefdoms: power, economy, and ideology』
Cambridge University Press、2000年(デジタル
版)、1～15頁参照。)

²⁷ 澤瀉久孝『時代別国語大辞典上代編』三省堂、
1971年(初版第二刷)、587頁・諸橋、1
971年、巻3・190～191頁。

²⁸ 「土器」は商品として価値があったのか。一般
の土器では、少し考えにくいだろう。むしろ、
「輸送容器」として考えた方が良いかもしれない。
土器自体ではなく、その中に入っていた「物」(商
品)が重要だったのではないか。(島根県埋蔵文
化財調査センターの内田律雄先生との談話によ
り。)

²⁹ 亀田修一「出雲・岩見・隠岐の朝鮮系土器」国
土交通省中国地方整備局出雲工事事務所・島根県
教育委員愛『斐伊川放水路建設予定地内埋葬文化
財発掘調査報告書XIIー蟹谷遺跡・上沢III
遺跡・古志本郷遺跡III』島根県教育庁埋葬文
化財調査センター、2001年、85頁。

³⁰ 亀田、2001年、97頁。

³¹ 児玉幸多『くずし字用例辞典』東京堂出版、2
005年(新装15版)、260～261頁又1
86～187頁。

³² 諸橋、1971年、巻4・149頁又巻3・1
75頁・日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』小
学館、1975年(縮刷版第一版第三冊)巻7・
612頁。諸橋は「垣土」=「ついちの土」とさ
れるが、ここは塀である「築地」(ついち)と解
したい。

³³ これは無理ではない読み取りだが、写本には
「作」の字は1回しか記載されていない。よって、
従来の解釈通り、「屋」は「居」の誤字で、「垣」
は「埴」の誤字であると考えた方が安全かもしれ
ない。但し、どちらの解釈をしても、素戔鳴尊は
兵士を商品(瓦或いは土器)に交換し、その商品
を船に乗せたことと読み取れる。

³⁴ 高安克己「宍道湖・中海の地形とその成り立ち」
佐々木興他『宍道湖・中海の漁具、漁法』島根県
立宍道湖自然館ゴビウス、2002年、4～6頁。

³⁵ 山本、2001年、458～459頁・坂本他、
1998年、126頁。

³⁶ 『出雲国風土記』の引用文は久松潜一『日本古
典選「風土記」下』朝日新聞社、1977年(新
装初版)により。本文の底本は「倉野氏本」であ
る。

³⁷ 加藤、1997年、428頁・山本、2001
年、419頁・秋本吉郎『風土記』岩波書店、1
997年(新装版第五刷)、236頁等同意。

³⁸ 山本、2001年、389頁・関、2006年、
989頁・久松潜一、1977年、139頁。

³⁹ 高安、2002年、五頁参照。

⁴⁰ 松本岩雄「出雲の青銅器」古代出雲王国の里・
推進協議会『出雲の考古学と『出雲国風土記』』
学生社、2006年、76～77頁。

⁴¹ 田中義昭「文明への足取り」松尾寿他『島根県
の歴史』山川出版社、2005年、46頁は同意。
しかし、渡辺も門脇もこの2つの団体は同盟して
いないとしている。(渡辺貞幸「古代出雲の実像」
道重哲男他『街道の日本史28：出雲と石見銀山
街道』、吉川弘文館、2005年、55頁・門脇
禎二「加茂岩倉遺跡、随想三題」古代学研究所『東
アジアの古代文化』93号、大和書房、1997
年、10頁。)

⁴² 渡辺貞幸「四隅突出型墳丘墓から古墳へ」古代
出雲王国の里・推進協議会『出雲の考古学と『出
雲国風土記』』学生社、2006年、137頁。

⁴³ Erich Pauer「Introduction to the history of Japanese
technology」Erich Pauer『Papers on the history of
industry and technology of Japan. Volume I: from the
Ritsuryō-system to the early Meiji-period』Marburger
Japan-Reihe、1995年、xx～xxii頁。

⁴⁴ Murakami Einosuke「The roots of traditional iron
sand smelting in Izumo, western Japan」Erich Pauer
『Papers on the history of industry and technology of
Japan. Volume I: from the Ritsuryō-system to the early
Meiji-period』Marburger Japan-Reihe、1995年、
124頁。

⁴⁵ 菅谷文則「漂泊の技術者集団の可能性ー鉄物を
求めて」古代学研究所『東アジアの古代文化』9
3号、大和書房、1997年、頁33。

⁴⁶ 春成秀爾「神庭(荒神谷)青銅器と出雲勢力」
島根県古代文化センター『荒神谷遺跡と青銅器』
同朋舎出版、1995年、210頁。

⁴⁷ 亀田、2001年、89頁。

⁴⁸ 勝部、2005年、25頁。

⁴⁹ Timothy Earle「The evolution of chiefdoms」
Timothy Earle『Chiefdoms: power, economy and
ideology』Cambridge University Press、1997年、
10頁。

⁵⁰ 加藤、1997年、133頁・植垣節也『新編
日本古典文学全集⑤ー風土記』小学館、1998
年(第一版第二冊)、148頁。

⁵¹ 渡辺貞幸「古代出雲の実像」道重哲男・相良英
輔『街道の日本史28：出雲と石見銀山街道』吉
川弘文館、2005年、64～67頁。

⁵² 例えば玉の材料は遠くから運ばれたようだ(島
根県教育委員会・島根県古代文化センター『古代
出雲における玉作の研究II』島根県教育委員会・
島根県古代文化センター、2005、174頁)。

⁵³ Søren M Sindbæk「Networks and nodal points: the
emergence of towns in early viking age Scandinavia」
『Antiquity』81：311号、York University、2
007年、128～129頁。

⁵⁴ Albert-László Barabási・Réka Albert 「Emergence of scaling in random networks」『Science』286号、1999年、510頁。

⁵⁵ 畿内にある勢力は吉備・出雲経由で朝鮮半島と貿易をしたという説もある（Gina L Barnes『*State formation in Japan: emergence of a 4th-century ruling elite*』Routledge、2007年、119頁・Gina L Barnes「Ceramics of the Yayoi agriculturalists」Erica H Weeder『*The rise of a great tradition: Japanese archaeological ceramics from the Jomon through the Heian Period*』Japan Society、1990年、37頁。

